悪人

ユキアネサ

《登場人物》
・母　アルヤ　Alya
・娘　メオイ Meoi
・息子　ヤウレ Yaule
・獣の司祭　メドリン　Medlin

《世紀》第12紀
《場所》ゴルノール　王都アラニエル　Araniel
《時代諸相》英雄の時代後期

首に爪足を突き刺すと、管のようなものがグニャっとしなった。メオイは力一杯にそれを掴んで、爪で切り裂いた。

鮮血。ドクドクと温かい血が、ツンと伸ばした足の甲を伝い、床に垂れ落ち、円い血だまりをつくった。

男が勢いよく殴り掛かって来たので、頭を後ろに反って躱した。拳がメオイの顎をかすめる。すぐにブリッジの体勢から、つま先を曲げて相手の顎にぶつけた。

その効き目を確認するまでもなく、メオイは体勢を戻して一生懸命に走り、黒枠の鎧窓を突き破った。

そして二階ほど下の下水路に飛び降り逃げた、全速力で。足裏に塗られた石灰の跡を残したくなかった。汚い埃だらけの胴衣に穴をあけ頭からかぶっているだけなので、風を受けると早速服の役目を果たさなくなった。

下水路を四つ足で疾走する間、過ぎ行く視界の中で、時たま夜空が見えた。星々とその光を受けた巨大樹と共に。**巨大樹ティングア**。私はあそこには行ったことはないし、見慣れて何の感情も抱かない。

お母さんは巨大樹を見る度に微笑して言った。

――お父さんは今**あそこ**にいるのよ。

お父さんの名前は結局分からないままだ。

――**お母さん！　お母さんっ！**

メオイは泣きながら走った。母は死んでしまった。巨大樹の話も、お父さんの話も、私達獣人族の歴史も聴けない。

人間の男どもが殺した。その死体で楽しんで、さっきの血だまりほどの何かを流しこんだ挙句、奴らはメオイに手を伸ばしてきた。だから殺した――

――私は悪い子なの？

たぶん悪い子だと思う。だって人族を殺したんだから。でも私とあいつら、どっちのほうが悪いんだろう。

メオイの尻尾はビクビク震えて、耳は必要な音以外は遮断するように、先っぽだけをチョンと上げていた。灰色の長髪は宙に揺蕩い、小さな猫の鼻は必死に道筋を調べていた。全身が恐怖していた。逃げなきゃ！　**ここから逃げなきゃ！**　人間が何よ！　そんなにあいつらは偉いの？　この世界にいたらダメになっちゃう。人族の支配する都市。そこで奴隷のように暮らしていた。あの角を曲がればいつもの住処に着く。汚い――**厳しい**暮らし。どうしてこんな目に遇うの？　もっと普通に生きたい！　私にも幸せになる権利があるはず。もっといい世界があるはず！　私に優しい世界が。月の光、星の光、あの巨大樹がいつになく輝いて見える。あそこが私の帰る場所なんだよ。きっと救われる。たぶん、愛もある。みんなあれに祈ってた。こんなところさっさと**出て**いけば良かった。

でも母は？　母は違った。このゴミ溜めで馴染む努力をしてた――頑張ってた。

＊＊＊

ガシャン！　高価な、金銀の流線の打ち出し模様がついた陶器が割れて、中身が客にかかった。

「ちょっと！　アルヤ！　ぼんやり**しないで**」

同じ給支係のライータがきつく言う。

「ごめんなさい、ちょっと眩暈がして……」

アルヤが割れた陶器を拾った後ライータを見ると、鋭い目つきで、顎をツンと上に突き出して命令した。

「ぼさっとしないで早く注文を持って来なさい！」

ライータのキーキーする声に頭を痛めながら、アルヤは街路沿いの店の中に入って行った。

街路の曲がり角に位置するパブは、席の半分は道の上にあった。夜になると店の周りの日よけ天幕や、机にあるパラソルに付いたランタンが柔らかくオレンジ色を放っていた。店前の石板には白い粉末で今日の一押しメニューが書いてある。正装になって笑顔で奉仕する獣人たち、机に座って注文するウールの革服やベストを着た人間たち。柔和な空気が漂い、オレンジのランタンが和やかに光輪を放つ。けれど、アルヤの目には何一つ輝いて見えなかった。

店の奥で片づけをしていると、さっきの客とライータが楽しそうに入ってきた。客はアルヤを見るとすぐに寄ってきた。

ドスン！

重い一撃が頬に当たった。

「お前のせいで買ったばっかりのチュニックが汚れちまったじゃねか、ああ？　弁償してくれんのか。無理だろうな、その身分じゃ」

ライータはしばらく向こうを見ていたが、一瞬だけ目が合った。鋭い縦長の瞳の一瞥。それは同情というよりは嫌悪に近かった。その後すぐ向こうを向いて、自慢のフサフサの尻尾を尖らせた。

アルヤは我慢の限界だった。反撃したかった。でもそれは利口なこと？　**人の世界**で生きていくためにやっていいこと？

「だいたいお前ら獣人族は死んで当然なんだよ。物語でよく聞くだろ……えーと、あいつ……そう、**地の獣**だ。地の獣とかいう悪い奴がお前らの先祖で、そいつが人間と交わって獣人族ができたんだろ。こんな下劣な種族でも半分は人間って訳だ。だから俺も最低限殺さないでおいてやる。その代わり二度と迷惑かけるなよ」

――そんな昔のことが私に**なんの**関係があるの？

男は叫んで出ていった。ライータはうやうやしく会計をしていた。普通の日常だった。腰を着き、膝を曲げ、顔も猫耳も下を向いてすすり泣くアルヤだけを残して。輝くランタンを受けた床はいつになく冷たく感じた。

帰路でアルヤはぼーっと考えていた。帰って、離れの綺麗な川まで洗濯をしに行く。それから戻って木製の使い古された皿を洗う。部屋の掃除をする。共有地にいって野菜を収穫する。周りに盗まれてなきゃの話だけど。魚と肉は高価だから買えない。収穫を数える。教会に渡す分を残す。アルヤはそんなことをいろいろやってきた。

暗い生活――**厳しい**暮らし。でも子供がいれば一筋の光が残った。

――ああ、あのいい子たちはいつだって愛をくれる。勇気をくれる。情熱をくれるわ。

住処に帰るとメオイとヤウレが元気いっぱいで迎えてくれる。今日あったことを話してくれる。昨日はヤウレが鳥を捕まえた話だった。一昨日は、農作物を野獣たちから一緒に守った話。三日前は……。

しかし、獣人族の待遇を子供たちに教えるのは気が乗らなかった。また暗さがやってきた。獣人族は**悪劣**で、精神遅滞で、低脳だと人間たちは言う。どうしてそんなに嫌われなければならないの？　その答えを得るために、アルヤの足は独りでに古ぼけた教会へ向かった。

中心街から離れた所にその教会はあった。小さな、雑草が茂った丘陵にひっそりと。石の階段の先に入り口があり、壁も屋根も不均等な石で作ってあった。そこの司祭メドリンはトラの氏族の出身で、面倒見が良いと評判だった。巨大樹に対して禁忌を犯した者を除いては。

アルヤはそっと教会に入った。木製のベンチの列の向こうでメドリンがレリーフに向かって跪いている。最上部が半円形になっている縦長のレリーフで、内側に巨大樹が描かれている。それは黄金の光を発し、その下には聖獣たちの姿がある。

アルヤは今日あったことを話した。その間メドリンは小さく丸い両耳をたまにピクっと動かすだけで、目を閉じて黙っていた。

「思い出せ」

話し終えるとメドリンが口を開いた。

「高慢な獅子の一族を。
残虐な黒狼の氏族を。
巨大樹に歯向かい、
崇めることを止めた種族が
どうなったかを。
彼らの牙は奪われ、
財産は貯まることはなく、
子孫という宝にも恵まれなかった。
彼らの待遇が悪くなったのは
彼ら自身の身から出たこと。
悪者は必ず罰を受ける。
これがこの世界の理。
御巨大樹様の掟」

メドリンは祈る両手を、胡麻のような小さい鼻に近づけ、石像のように固まったままだった。

「でも、そんな悪いことをした覚えはないです！　なんで私だけ辛い目に遇うの？」アルヤは上目遣いで見た。尻尾は垂れ下がっていた。

「そも我ら、生まれながらに悪を宿す
なんとなれば地の獣の子孫の為に
故にこそ我らの一生は償いである。
受難である。
人族の奉仕に身を捧げ、
忍耐と服従を美徳とし、
御巨大樹様に希（こいねが）う
悪の浄化を求めて。
御巨大樹様は、
来る救いの日には
天にも届く誇り高き獣たち、
聖獣様を遣わして
我らと共に新天地へと旅立たん
だから、渇求（かっきゅう）の娘よ、
今は忍耐の時である」

メドリンは目を閉じたまま、朗々と言った。

「その巨大樹はいつ助けてくれるの！　そもそも本当に救ってくれるの？　分からないわ……。そうして待つぐらいなら直接**あそこ**に行っちゃだめなの？」

メドリンは急に目を見開き、固く握った両手を離した。非難がましい声を発し、尻尾の毛が逆立っていた。トラ特有の、黄色の中の黒い瞳がこちらを突き通すように睨んでいる。

「御巨大樹様を疑うのか？
彼を疑うことはすなわち冒涜である。
冒涜の**獣**よ、汝にはこの聖典の成句で以て答えん
『星々生まれ、墜ちる時、
汝その時いつ知るか。
空が吐く星、満ちる時、
其を結び留め、解き放つ、
汝その業、なし得るか。
世界支え、聖獣守らん、
その経綸（はかりごと）、なし得るか。
山岩までも、いざ消ゆ時、
それでも残る、彼知るか。
ヒュブリスの禍、起きつ時、
それでも残る、彼知るか。
陸の奥まで、水侵す時、
それでも残る、彼知るか。
巍然（ぎぜん）と峙（そばだ）つ、その姿。
劃（くぎ）る、宇宙の七方位。
彼が決める、聖別の日。

彼が定める、救済の日。
獣の子らよ、推し量るな。
生命、拳の中に置き、
彼を疑うこと勿れ』
汝はたった今、悪を成した。
彼を冒涜するという悪を。
それは死によっても解決できない。
これは生死の問題ではなく、
正に、**善悪**の問題なのだ。
死の国でも彼と共に過ごせない**悪い獣**め。
もはや教会に立ち入る権利はない」

――社会も、教会も悪だと言う。でも分からない。納得できない。私のどこが悪なの？

家に着いて、家事を済まし、寝る前の手持ち無沙汰の時間を使って考える。

瞼の裏に小さな星が見えた時、アルヤは眠りに落ちる。

海の淵がある。その上に立っている。誰が――？　私だわ。その淵を境に濃淡が異なっていた。一方は陰湿でみんなが私に冷たい世界。もう一方は――よく分からない。さっきから周りの声が聞こえている。

――お前はあの暗い世界の住人だ、あそこにいるべきだ、と。

でも本当に？　分からない、答えが欲しい。ああ、沈む――海の淵が流れ込んでくる。溺れさせようとしている。アルヤは助けを求めて鉄の手摺に両手を必死に伸ばした。堅固で頼りがいのある手摺。触れた瞬間アルヤはぼんやりと思い出した。これは鉄のように硬く、馴染んだ習慣――幼い頃からの洗脳、社会に底流する無形の常識――みんなが共有している。

もう一方の、不明瞭な世界から声が聞こえる。

――こっちに来るんだ！

ダメ、ダメ、ダメ！　行けない。どうして？　こんなにも**行きたい**と思っているのに。

――アルヤ！

夫が叫んでいる、サブロンが。あなたはどうして、そっちに行く決断ができたの？　そこで幸せになれたの？

――手摺に掴まってちゃダメだ！

鉄の手摺から手を離すのが怖い。最後の勇気が出ない。**自分**を見失うような気がした。幼い頃から人の暮らしを見すぎてしまった――仕事、収穫、結婚。それは鉄の習慣になった。

だからアルヤは淵の中で、ただもがいていた。苦痛の叫びを上げていた。

気が付くとアルヤは子供達と外を歩いていた。汚い路地裏のように見えるし、まだ自分が淵に立っているようにも見える。よく分からない……。巨大樹は遥か遠くに見えた。遠い、あまりにも。そこに行く**勇気**は終ぞ出てこなかった。巨大樹は、永遠に解けない問題をアルヤに投げかけていじめる、漆黒の塔のように見えた。

二人組の男が話しかけて来た。折れ曲がり明滅を繰り返す街灯が淡い橙の明かりを投げかけ、彼らの黒いなめし革のブーツを照らし出した。それから上に降りかかりひだ豊かな黒いウールのガウンを捉えた。

彼らは何て言ってるの？　メオイが怖がって私の後ろに隠れる。汚れたボロ布の衣にしがみつく。

それを受けてアルヤは無気力そうに、蒼白で、骸骨のような顔を漫然と男達に向けた。その目は彼らに、非難のしるしも、恐怖のしるしも、いかなる**善悪**のしるしも送らなかった。

＊＊＊

そして母は死んだ。

――さあ行こう！　ヤウレも連れて。

メオイは巨大樹を見る。聖獣様がいる、明るい希望に満ちた未開。

ディングアは全てを見抜いている。

――遠くにあるのなら、近づこう。

道は分かる。歩く意志だってある。

咎める者も、人族も、

全て忘れて、やっと思い出した故郷へ――